

生涯学習情報誌

Life Learning

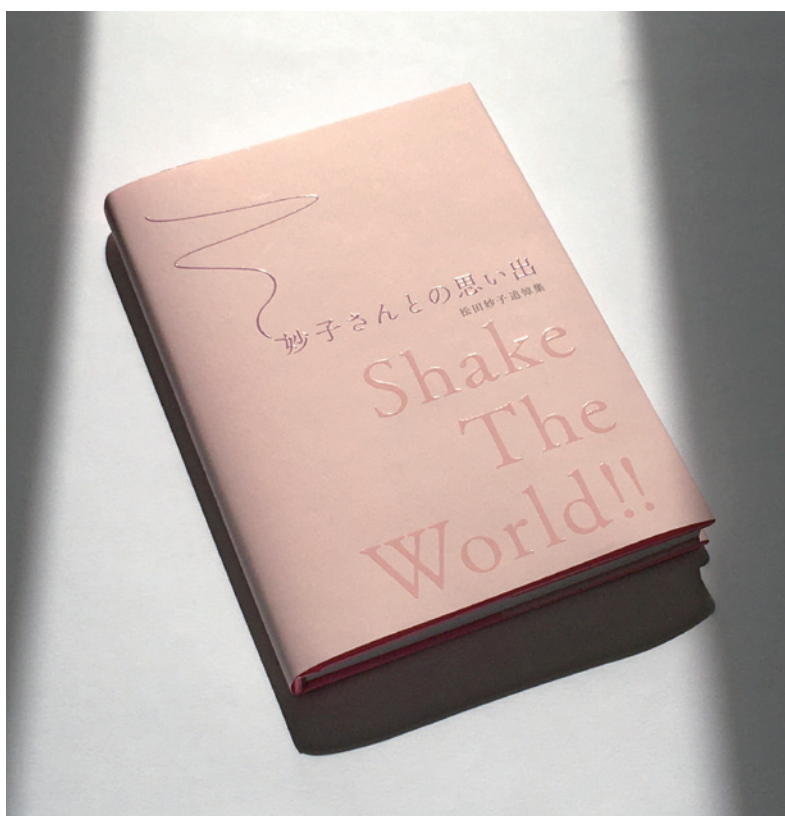
3 2020
Mar.
NO.355



前理事長 松田妙子の追悼集ができました

2019年2月8日に死去しました生涯学習開発財団 前理事長松田妙子の追悼集『妙子さんとの思い出』（生涯学習開発財団発行・非売品）が、一周忌に合わせて上梓されました。財団会員各位、お別れの会にご会葬くださった皆様には進呈いたしましたので、ぜひご一読ください。

（以下本文より抜粋）



追悼集を残すのは、遺族としては恥ずかしさもあるのですが、皆様に請われ、最後まで理事長を務めた一般財団法人生涯学習開発財団の今後の活動に寄与できるならと、松田妙子をよく知る方、特に長く親しくさせていただいた方を中心に寄稿をいただきました。

松田妙子は、常に利益より先に「世の中のため」でした。その教訓を、次は私たちが広く社会に伝えていく決意です。そこそが、母、松田妙子が一番よろこぶことと確信しております。

一般財団法人生涯学習開発財団 理事・事務局長

長女 佐藤梨奈

妙子さんには「横ちゃん、自然体もいいけど、やるときはやんなさいよ!」と発破をかけられるときもあったのだが、今がその時かもしれない。生涯現役だった妙子さんには、世の中のためにやりたかったことがまだまだあったと思う。

そのバトンは私たちが受け取り、次世代に引き継いでいきますので、どうかご安心ください。

みなさま、引き続き生涯学習開発財団へのご協力とご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

一般財団法人生涯学習開発財団 理事長

横川 浩

みなさんとともに、より良い生涯学習社会の実現をめざします！



↓ 乾杯のご発声は小林史明衆院議員。



↑ 財団評議員の遠藤啓氏から冒頭のご挨拶をいただいた。

なかなか聴く機会がないハーブとチェロの二重奏。ハーブ奏者の村上奈菜子さんとチェロ奏者の堀沙也香さんに会場から何度も拍手が。アンコールを含め5曲が演奏された。



↑ 松田前理事長との30年来の思い出を語る山口杜衆院議員。



↑ 『日本の技』シリーズにご登場いただいた白磁の人間国宝・井上萬二先生は、佐賀県有田町からご参加くださった。



生涯学習開発財団は、今までも、これからも



会員の皆様とともに前進します！



Lレメンバーズ交流会が1月30日、東京・虎ノ門の霞山会館で開かれた。

開会のあいさつは遠藤啓評議員。「生涯学習開発財団は、松田前理事長の人徳とちよつとした毒氣に人が集まり、活動の輪が広がっていった。昨年逝去され寂しいが、人生100年時代となり、生涯学習の重要性はより増している」と財団の意義を訴えた。

乾杯の音頭は小林史明衆院議員。「人生100年時代は、小泉進次郎氏と私で提唱させていただいた。1丁の発達により、どこでも学ぶことができ、学んだ結果や取得資格の履歴が残り、努力が報われるようになった。元気な100歳を目指して学習を重ねたい」と意欲を示してのご発声となった。

歓談・食事中には山口杜衆院議員が壇上に立った。「松田前理事長とは30年以上の付き合い合い。ご自宅にもよく誘われ、これからの日本について論を戦わし、よく叱られもした。ご長女の佐藤梨奈事務局長とも親しくさせてもらっており、財団会員の皆様とともに良い社会づくりに努めたい」と述べた。

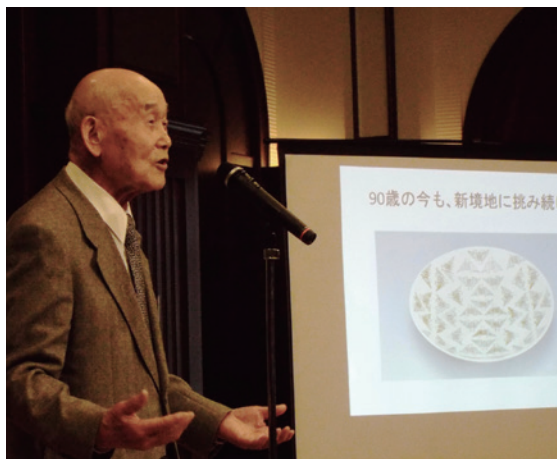
今年のエンターテイメントはチェロとハーブの二重奏。チェロ奏者の堀沙也香さんと、ハーブ奏者の村上奈菜子さんがステージに。最初の曲はサンサースの動物の謝肉祭から白鳥。次いでシヨパンのノクターン。松田前理



↑お見送りの際に、できたての松田妙子追悼集『妙子さんとの思い出』が贈呈された。



↑松田前理事長が好きだったグノーのアベマリアに合わせたスライドショー。



←91歳の今も新境地に挑み続ける井上萬二先生。はつらつとしたスピーチに皆が聞き入った。



→博士号取得支援事業の成果報告が、選考委員長の張競先生からされた。



↓日本陸連会長としての出張の帰途、東京駅から駆けつけあいさつをする横川浩理事長。



→恒例となったテノール歌手・榛葉昌寛さんの熱唱。



↑ ↓博士号関係者や情報誌の記事にご登場いただいた方もたくさんで参加されていた。



↓財団と一緒に生涯学習を推進する協賛会員の方々も紹介された。



この後、協賛会員紹介、博士号支援取得事業の報告と続き、テノール歌手の榛葉昌寛さんによる力強いカルーソの独唱で締められた。

閉会のあいさつは財団理事長・横川浩から。「40年おつきあいいただいた松田前理事長に恩返ししたいと思い、理事長を承った。私は日本陸連の会長でもあり、間近に迫る東京オリンピックに向けて準備中だ。陸連には生涯スポーツの推進という使命もあり、生涯学習とあわせて、人生100年時代をアクティブに生きるための両輪と認識している。みなさんとともに、健康長寿社会と生涯学習機会充実に貢献していきたい」と締めた。

事長が好きだったグノーのアベマリアに合わせたスライドショー投影の際は、涙を拭う人の姿も見受けられた。

続いて白磁の人間国宝・井上萬二先生からスピーチをいただいた。戦時中は学校では勉強にならないと海軍予科練に志願。厳しい訓練と英語を習ったことが後に生きた。終戦後父親のすすめにより柿右衛門窯で無給の修業を7年、恩師の初代奥川忠右衛門に出会い、さらに7年間師事。独り立ちできる腕になっても窯業試験場で土や釉薬の研究をし、誰にも負けない自信がついた。単身アメリカで教えることになり、予科練での英語をベースに、毎日5つ単語を覚え、一人で飛行機を乗り継いで行った。91歳の今も毎年和光で個展を開くが、お客さんが飽きないような同じ作品は出さない。それが健康の秘訣だという。生涯学習のお手本となる生き方を語った。

協賛会員の共通課題やコラボレーションについて意見交換をしました

財団 本日は協賛会員4社にご参加いただきました。他分野の協賛会員がビジネス面でのように取り組んでいるのか、そしてどういった問題や課題を持っているのか。それらを共有いただいたうえで、解決へのご提案、コラボレーションのアイデア、財団活動への反映など、ともに発展していくための意見交換ができればと思います。

まずはこういう場を設けてはとご提案いただいた、株式会社オールアバウトライフワークス様からご紹介したいと思います。文化創造分野で51もの資格認定を出され、近年は海外にも展開しておられます。

菱倉 当社はジュエリー教室の先生や編み物の先生など、趣味の分野で起業をめざす方々を応援する団体で、協賛会員は3年目です。大きな分類は、ビーズアクセサリー、ファブリック(手織りや編み物)、フローラル(花)、フードアート(クッキング)、ゼネラル(その他の新しい分野)という括りで、51の資格を財団から認定いただいております。取って終わりの方もいますが、教室を運営していく方には、自社で開発したレッスン用の教材を購入していただいております。

ここ10年くらい専業主婦世帯が激減し、さらに家族の介護や自身の健康的理由で、



教室が開けないとか、生徒が減ったというケースが顕在化しています。そんな中で、社会貢献としての役割を打ち出し、自宅で教室を開くよりも外に出て、地域交流としての講師の活躍の場を作っていく、そうしたことも推進しているところです。

財団 最初に財団に来られたときに、手仕事は人それぞれに仕上がりが違うので後援は難しいと思ったのですが、教科書を拝見

すると、とてもきめ細やかで、さらに講師用には、生徒さんがここで引っかけたらどう対処するといった虎の巻的なヒントもあり、非常にきつちりと教材を作られていました。これだったら学びの水準が保てると安心しました。

菱倉 当社以外でも、キットを売る手芸店や教室の場所を提供するところは多くありますが、いちばんの問題は教える講師がいらないということです。面白い相談もありまして。保険の相談窓口や携帯シヨップなどでは、曜日や時間帯によっては人が来ないと。その時間に店舗の一部で教室を開いてもらい、人が常に店内にいる状態を作り、保険や携帯のことが気になったら相談できる場にしたというのです。そういったイレギュラーの要請にも対応できる講師の力が必要になってくるだろうと思います。

財団 続きまして、最近協賛会員に登録された薬膳教室胡桃の庭(株式会社365)様をご紹介します。

大根田 去年の7月に協賛会員にならせていただきました。現在は横浜市のあざみ野、たまプラーザ、中川の3拠点で薬膳教室を開いています。薬膳は東洋医学がベースで、座学が8割、料理が2割くらいの比率です。財団認定資格は中医食療薬膳師で、3〜1

級まであります。3級はレポート提出、2級は筆記試験、1級は実技試験と難易度も上がります。

当教室の問題としては、講師が私一人しかいないことです。生徒数が約250〜300人、年間の講座数は130〜150回で、数日に1回は開講し、朝・昼・夜と立ちっぱなしで教える日もあります。もしも私がインフルエンザにかかった場合などを考えると、リスクは大きいです。1級を取得できれば講座で教えられるレベルなので、まずは1級を育ててはいけません。それと生徒さん自身に体の不調があった時に、薬膳を通して改善のヒントが得られるよう、内容を磨いていくこと。1級を取得して教室を開く方を支援することで、社会貢献につなげたいと思っています。

財団 東洋医学は中国の歴史と同じくらい奥が深いそうなので、短期間で教えて講師を育てるとはいかないのですよね。

大根田 そうですね。薬膳料理を自分で作れるくらいまでに必要な学びとなると、少なくとも1年3か月はかかります。人に教えるとなると知識だけでは足りないのので、実技試験も行います。奥が深いからこそ面白く、ハマる人も多いという部分もあります。それと、皆で作って食べるのは楽し

いので、料理の講座はいつも人気です。

財団 次は、アートセラピーという日本では少ない資格認定をされている、株式会社クレスト総合研究所様をご紹介します。

柴崎 1998年に設立をし、財団さんには2005年からお世話になっています。

アートセラピーは心理療法なのですが、日本では非常に遅れていました。独自の認定学校はありましたが、うちはそれらと馴染まない内容で、財団さんに相談したのです。

1年間勉強した後、試験に合格、論文を出していただいて認定というスタイルをとっています。卒業生は1000人ほどおり、その中で財団さんの資格を持っている方が400〜500人かと思っています。財団の認定資格と並行して、2014年から、仕事として治療に関与したい人向けに、日本にいながら国際基準の臨床アートセラピーの資格も取れる形になりました。

資格を取ったセラピストさんを、福祉、生活支援、就労支援、発達障害のお子さんといった現場に派遣して、活動してもらうといったサポートもしています。

並行してNPO子ども未来研究所という団体も20年ほどやっています。世田谷一家殺害事件直後から、小学校とスクールカウンセラーさんと児童館の協力を得て、セラピー教室をやりました。東日本大震災の避難地域だった福島県の広野町でも5年間、子供たち向けにサポート活動をするなど、社会貢献活動も財団の資格を持ったセラピストが中心になってやっています。

←オールアバウトライフワークスの菱倉英一社長



↓クレスト総合研究所の柴崎嘉寿隆代表と柴崎千桂子学院長



↑薬膳教室胡桃の庭の大根田笑子代表



→医療福祉情報実務能力協会の別府武彦理事長



近年は予防ということに着目してアートワークカフェを開き、一般の方が自由に入りできる場で、アートセラピーを体験してもらっています。

財団 社会貢献やカフェでアウトプットできること、活躍できる場所があるってことが素晴らしいことだと思います。

柴崎 やってみて需要があることもわかりましたが、先ほど菱倉さんもおっしゃった、場をどうやって作るか、どう広げていくかというのが課題です。アートワークカフェは、コーヒーを飲みながらアートをするといい1時間程度の簡単なセッションなのですが、その場を持つにしても2年は勉強しなくてはいけない、そのギャップを今感じ

ているところです。卒業生が全国各地域で開いている子どもの教室は20数か所あり、そういった卒業生の活動を支えるとか、カフェもやらせてあげたいんですけど、なかなか自分で集客するノウハウがなく、皆さん苦労されます。

財団 最後にご紹介いただくのは、NPO法人医療福祉情報実務能力協会様です。

別府 財団とは15年くらいのお付き合いです。医療福祉情報実務能力協会を母体としたメンタルケア学会で、「こころ検定」という心理学の資格を提供しています。こころ検定の前に、メンタルケア心理士、メンタルケア心理専門士を財団認定資格として15年くらい出しています。その講座をOEMとしていろんな学校さんに販売しており、そこで受講して検定試験を受ける形で、受講生は3〜4万人いらっしゃいます。

メンタルケア学会は、主に大学の心理学部を出た人たちが構成されています。ただ、他の学会と違うところは、大学院や学部卒といった入会資格をなくし、心理学をある程度修めた人であれば学部を問わず、また社会人で学んだ人も学会員として活動できることです。学部でなくても、もっと身近な学びもあると思います。

財団 こころ検定はどういった点が特徴の資格なのですか。

4級から1級までありますが、4・3級は中学卒業レベルでも理解できるテキストを作りました。高校生や、大学生でも学部を問わず勉強してもらいたく、受験資格を

なくしました。ただ、1級だけは2級を持っていないと受けられません。高校生や大学生にアピールするために、学校訪問を行っています。カウンセラーになるのはハードルが高いけど、そこまでいなくても、心理学を気軽に学ぶ人たちの増やしたいというのが一番の目的です。

財団のご協力もあり、こころ検定は、昨年度文部科学省から後援をいただきました。英検や漢検と同じ立ち位置で展開できます。一般の人が心理学を学ぶことによって日常生活が楽になる、ある程度心の悩みを解決できるということを、当人はもちろん、先生方やご家族にも知ってもらうことが大事です。公認の心理士や臨床心理士が「自分で勉強すると腑に落ちることもあるよ」と、こころ検定を家族に勧めてくれて、受験されることもあります。

今はこころ検定に注力していますが、いずれは医療福祉も結びつけて「心」「体」「食」の三位一体でビジネス展開していきたいと考えており、食に関するカリキュラムも作成中です。

財団 ありがとうございました。それぞれの認定資格を、時代に合わせて工夫や変化を模索してきたこと、そしてこれからの課題などもご共有いただきました。課題解決のヒントや、財団も含めて何かコラボしていただけるか、この会をどう活用していただけるか、後半はそういう意見交換をしていただけだと思います。

(次号に続く)